震災後のわが社

～被災地再開事業所紹介～

株式会社プリント電子研究所
広野工場

所在地：双葉郡広野町

事業内容：

プリント基板のパターン設計、ＣＡＤ設計、フォト作画
プリント基板等の製造（フレキシブル、テフロン等、特殊基板にも対応）
フレックスリジッド、多層フレキシブルの製造
超大型基板、超長尺基板の製造
金属板等のエッチング加工
プリント基板の実装（部品実装）　　その他

当社プリント電子研究所は私の祖父が創業し、2017年12月で50期を迎えた電子デバイス製造業です。現在は川崎に本社、福島県の広野町に工場があり、従業員は私を含めて20名弱の人数構成です。従業員の多くは広野町の工場で勤務しており、川崎の本社では営業が数名での構成となっている会社です。

さる2011年3月11日東日本大震災が起こり、さらにその後、原発事故が起きたことにより、当工場がある広野町は緊急時避難準備区域に指定され、一時立ち入りができない状態になってしまいました。また、当時の従業員も散り散りに各地に避難していたこともあり、広野工場では当時休業を余儀なくされ、生産ができない状態となりました。

しかし、お客様がいる中で製品の供給ができなくなるわけにはいかず、原発事故の先行き不透明感から一時的に本社に行き、そこで企業活動を行うことを決めました。お客様も事情を理解してくれていましたが、製品の供給を停めてしまうにはいかないという事情もあります。そのため、お客様としては製造できないのでは他社に製造依頼をするしかなく、お客様が離れてしまいます。そこで、本社でお客様から注文を受け、協力会社で製造をするという形をとっていました。また、当時本社から通勤可能な範囲に避難していた従業員が数名おり、この話を聞いて一緒に本社での営業活動を手伝ってくれました。東日本大震災という未曽有の災害時に自分のことでも大変なはずなのにこのような形で協力してくれたことには大変感謝しています。

とはいえ、このまま協力会社で製造していては営業利益が圧迫されるため、この先会社を継続していくことは不可能な状況でした。また、当時は原発の影響がどこまで影響するのか不透明であり、広野で事業を続けられるかどうかもわからなかったため、広野工場の移転・廃業を考えざるを得ませんでした。しかし、そんな中、当社と同じ広野工業団地内の企業でも工場稼働の検討をしており、今の場所で事業を再開したいと考えている企業があると聞き、当社も協力をしながら広野工場での再稼働をしようと決断しました。そのために広野町や工業団地内の企業との何度も連携を取りながら、工場稼働に向けて舵を切ることにしました。当社には放射能の知識や資金力はそこまでなかったのですが、同じ広野工業団地内で放射能などに詳しい企業がおり、放射線量を計測したり、放射線の知識を教えてもらったり、それを当社の従業員に説明してもらう機会をもったりと協力いただくことができました。当時の状況の中で工場の再稼働にはたくさんのハードルがあり、多くの方々の手助けなしには成しえなかったことだと思います。

当社内で、従業員が戻ってきやすいように工場内、工場敷地の除染を行い、稼働準備を整えていきました。その中で、2011年7月16日、ついに工場稼働を再開しました。しかし、原発事故の影響で当社広野工場の従業員は14名中6名が退職しており、再稼働を始めたとは言え、実際に自社で稼働している割合は3割程度であり、フル稼働とは程遠い状況で赤字は膨らむ一方でした。稼働を増やしていくために従業員を募集しており、2011年の9月に新たに二人の従業員を採用することができました。まだまだ先の見えなかった広野工場で働いてくれる意思があるというのはとてもありがたいことでした（二人とも今でも働いてくれています。）今では広野町にも町民がかなり戻ってきて、隣町の楢葉町にも避難指示解除が出たことで、入社希望者も少しずつ来るようになってきました。震災前の人数と同等程度となり、大分安定してきています。

また、 東日本大震災から7年以上が経過しましたが、今でも会社を継続しています。振り返ってみると最初に工場稼働をするにあたって安心して働けることが課題でしたが、その際には放射能を測定してもらうことができました。また、その内容を専門家が客観的に私や従業員に説明してもらうことができました。人も年月の経過とともに徐々に辞めてしまう人もはいましたが、そのたびに新しい人が入ってきて今を迎えることができています。苦労することはたくさんありましたが、人生はあまりに悪いようにはならなくて結局何処かで「なるようになる」ものなのかもしれないなと思っています。

電子デバイス製造業は現在、コスト競争が激しくなっており、量産品は殆どが海外で製造されています。当社のように国内のみで事業をしている会社にとってコスト減の要求は厳しく海外製品には太刀打ちできません。また、業界では国内需要は頭打ちの傾向にあります。私は三代目の社長となりましたが、今後さらに飛躍するためにこれまでと同じことをではなく、この先新しい柱を見つけることが私の使命なのだと思います。当社は2017年12月で50期という節目を迎えることができましたが、半世紀という長い年月を継続してこられたのもこれまでご協力・ご支援いただきました皆様のおかげです。本当にありがとうございました。次は100年企業に向けて従業員共々より一層精進してまいりますので、これからもご支援の程よろしくお願い致します。